

# 教育研究業績書

氏名 坂口 太郎

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年 月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合の み記入)	該当 頁数
(著書)						
『橋本市史 古代・中世史料』	共著	2012年3月	橋本市	和歌山県橋本市の自治体史シリーズの一冊。同市域に関係する古代・中世史料集の決定版というべきもので、総頁数は1100頁に達する。とくに、「高野参詣」「隅田荘と隅田氏」については、未刊の荘園文書・寺院史料を多数収録し、平安時代から戦国時代までの高野参詣の事例を網羅した。 担当部分：「古代・中世の「橋本」とその史料」「高野参詣」「隅田荘と隅田氏」「相賀荘と坂上氏」「政所荘(官省符荘)」「高野口町域の文化財」	橋本市史編さん委員会(上横手雅敬、小倉英樹、坂口太郎、横澤大典、吉田賢司)	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
『住心院文書』	共著	2014年3月	思文閣出版	京都の住心院(聖護院門跡の院家先達)に所蔵される古文書を活字化した史料集。とくに、旧蔵文書や関連史料も加え、収録点数は202点の多くを数える。室町時代以降の修験道史研究の根本史料として、今後ながく利用されることと考えられる。 担当部分：鎌倉時代～江戸時代の古文書の翻刻、解説「住心院初代長乗について」	首藤善樹、坂口太郎、青谷美羽	pp. 3-127, 194-201
『大正・昭和戦前期における徳富蘇峰と平泉澄—その史学史的考察—』(第19回松本清張研究奨励事業研究報告書)	単著	2019年3月	北九州市立松本清張記念館	日本近代史学史上、重要なエポックとなった大正期から昭和戦前期の歴史学について、平泉澄と徳富蘇峰の二人を中心に詳細な考察を加えた。主たる論点は、平泉の時代区分論、蘇峰と官学アカデミズムの関係、平泉の国粋主義化の契機と活動、などである。また平泉が蘇峰に於てた書簡類(徳富蘇峰記念館所蔵)の全文翻刻を付載した。		pp. 1-94
(学術論文)						
「男山八幡合戦と楠木正儀」	単著	2003年4月	『季刊 ぐんしよ』第56号(統群書類従完成会)	正平7年(文和元年、1352)の男山八幡合戦における楠木正儀の動向を論じた。合戦中、河内東条にいた正儀が男山八幡の南朝本営の救援に赴かなかつたのは、足利義詮が東条に派遣した晦谷祖曇(楠木氏縁戚)との和平交渉に期待をかけていたからであり、正儀は東条に幽閉されていた北朝三上皇(光厳・光明・崇光)の解放と引き換えに足利勢による男山八幡の包囲を解かせることを考えていたと推測した。※査読あり		pp. 33-37

<p>「太平記考証ノート (一) 一聖護院庁ノ法 眼玄基・万里小路宣房 五部大乘経供養小考 一」</p>	<p>単著</p>	<p>2008年3 月</p>	<p>『寺社と民 衆』第4号(民 衆宗教史研究 会)</p>	<p>『太平記』の注釈書において未詳とされた二つの問題を解明した。まず、後醍醐天皇の行った「無礼講」に出席したという「聖護院庁ノ法眼玄基」が、実在する聖護院坊官であったことを、『玄玖本太平記』の記載を手掛かりに『尊卑分脈』に基づいて明らかにした。また、従来不明であった万里小路宣房による春日社五部大乘経供養の日時を、近年紹介された『継塵記(実任卿記)』嘉暦元年11月7日条の記事から明らかにした。※査読あり</p>	<p>pp. 1 -7</p>
<p>「後醍醐天皇の寺社重 宝蒐集について」</p>	<p>単著</p>	<p>2008年9 月</p>	<p>上横手雅敬編 『鎌倉時代の 権力と制度』 (思文閣出 版)</p>	<p>後醍醐天皇による寺社重宝の蒐集に注目し、関係史料の博捜を通して、後醍醐が東寺仏舎利・山門前唐院・伊勢外宮を始めとする大寺社の重宝を召し上げ、これを内裏に置いていたことを明らかにした。そして、討幕祈願の修法において東寺仏舎利が本尊に用いられたことや、足利尊氏の調伏祈祷にも多くの重宝が用いられたことから、寺社重宝は後醍醐にとって王権の危機を克服する霊物とみなされていたと位置づけた。</p>	<p>pp. 2 87- 314</p>
<p>「建武新政・南朝と院 政—後院の設置を中心 として—」</p>	<p>単著</p>	<p>2008年12 月</p>	<p>『人間・環境 学』第17巻 (京都大学大 学院人間・環 境学研究科)</p>	<p>後醍醐天皇・南朝が天皇親政を目指したとする通説を批判し、むしろ後醍醐が院政を構想していたことを論じた研究。後醍醐と南朝が後院(天皇在位中に予め設置される譲位後の居所)を設置していた事実注目した上で、鎌倉末期から建武新政期の政治状況が、後醍醐に退位を許す状況ではなかったことを指摘した。さらに、南朝が正平一統において後院を設置したことや、長慶天皇が譲位後に院政を布いた事実から、南朝は院政を是とする政治的志向を持っていたと論じた。※査読あり</p>	<p>pp. 9 1- 105</p>
<p>「持明院統の石清水御 幸—七日参籠と最勝八 講をめぐって—」</p>	<p>単著</p>	<p>2010年3 月</p>	<p>『花園大学国 際禅学研究所 論叢』第5号 (花園大学国 際禅学研究所)</p>	<p>鎌倉後期の持明院統の院による、石清水八幡宮への御幸について論じた研究。後嵯峨院政期以降、石清水が王権を支える宗教権威として存在感を増していたことを踏まえつつ、次代の後深草院による石清水での法会(五部大乘経供養、最勝八講)について、その政治的意義を論じた。また、後深草以降の持明院統の院が、石清水に奉納した願文を素材として、持明院統の嫡流意識を明らかにした。</p>	<p>pp. 2 83- 290</p>
<p>「東京大学史料編纂所 蔵『五大虚空蔵法記』 について—後醍醐天皇 と後宇多院法流—」</p>	<p>単著</p>	<p>2011年10 月</p>	<p>『古文書研 究』第72号 (日本古文書 学会)</p>	<p>近年、後醍醐天皇の宗教権威の前提に、その父 後宇多院の密教興隆があることが指摘されている。これをうけて、新史料『五大虚空蔵法記』を紹介し、後宇多が創始した大覚寺門跡・後宇多院法流が後醍醐の宗教的護持に大きな役割を果たしたことを明らかにした。また、鎌倉北条氏の残党による建武政権転覆計画を指摘し、後醍醐の権力が水面下で大きな危機を迎えていたことを論じた。※査読あり</p>	<p>pp. 1 8-41</p>

<p>「鎌倉後期・建武政権期の大覚寺統と大覚寺門跡—性円法親王を中心として—」</p>	<p>単著</p>	<p>2013年4月</p>	<p>『史学雑誌』第122編第4号 (史学会)</p>	<p>後宇多院・後醍醐天皇の時代における大覚寺門跡の展開を、通時的に検討した研究。真言密教の諸法流を相承した後宇多は、新たに大覚寺門跡を創始したが、その後継者として皇子の性円法親王を据え、權威の拠り所とした。後宇多の死後、大覚寺統の家長となった後醍醐は、性円と大覚寺門跡を手厚く保護するだけでなく、皇子・恒性を大覚寺に入れ、討幕計画を進める上でも大きな期待を寄せた。大覚寺門跡は、大覚寺統の宗教政策の根幹に位置した重要な寺院であり、性円は後醍醐の王権を支える役割を担ったのである。※査読あり</p>		<p>pp. 1-39</p>
<p>「『五大虚空蔵法記』所収「仏眼法記」記主考」</p>	<p>単著</p>	<p>2013年12月</p>	<p>『古文書研究』第76号 (日本古文書学会)</p>	<p>上掲「東京大学史料編纂所蔵『五大虚空蔵法記』について—後醍醐天皇と後宇多院法流—」の補論。前稿の失考を訂正するとともに、「仏眼法記」の記主が仁宗という僧侶であることを指摘した。あわせて、初期の大覚寺門跡の構成員には、仁和寺御室に関係する僧侶が多かったことを論じた。※査読あり</p>		<p>pp. 128-129</p>
<p>「北畠親房をめぐる諸問題」</p>	<p>共著</p>	<p>2014年3月</p>	<p>『皇學館大学研究開発推進センター神道研究所紀要』第30輯 (皇學館大学研究開発推進センター神道研究所)</p>	<p>北畠親房と真言密教の関係については、これまで親房の著作『真言内証義』を中心に研究が進められてきた。しかし、親房を真言密教に結び付けた背景は、いまだ不明のままである。そこで、親房の祖父北畠師親が真言密教に信仰を寄せていたことを解明し、師親が親房と密教との関係を考える上で重要な存在であることを指摘した。また、親房の主君後宇多院は、真言密教の興隆を強く推進しており、この後宇多の宗教政策が、南朝を率いる晩年の親房に影響を与えたことを論じた。</p>	<p>坂口太郎、下川玲子、勢田道生、岡野友彦、深津睦夫、白山芳太郎</p>	<p>pp. 67-85</p>
<p>「鎌倉後期宮廷の密教儀礼と王家重宝—清浄光寺蔵「後醍醐天皇像」の背景—」</p>	<p>単著</p>	<p>2014年4月</p>	<p>『日本史研究』第620号 (日本史研究会)</p>	<p>網野善彦氏が注目して有名になった、異形の「後醍醐天皇像」の背景について論じた研究。後醍醐像に描かれた装束の正体が、内蔵寮礼服蔵に伝来した古代の天皇にまつわる礼服であったことを解明した上で、後醍醐が「即位灌頂」を行っていたことを指摘する。即位灌頂は天皇權威に直結する儀礼であり、討幕を目指す後醍醐は、かかる儀礼を行うことで超越的權威の獲得を企図したと考えられる。※査読あり</p>		<p>pp. 1-29</p>
<p>「『愚管抄』校訂私考」</p>	<p>単著</p>	<p>2016年9月</p>	<p>『古代文化』第68巻第2号 (古代学協会)</p>	<p>『愚管抄』のテキストとして利用されている日本古典文学大系本の校訂について検討を加え、『愚管抄』の本文復元を前進させることを目指した研究。まず、古態性をとどめる文明本・東山御文庫本を以て、古典大系の誤脱・衍字を明らかにするとともに、古典大系の底本である島原本の後出性を、人名表記の改変から指摘した。ついで『簾中抄』や『玉葉』に基づき『愚管抄』の誤脱を検討し、後人の註記を具体的に指摘した。あわせて、『愚管抄』の別記逸文にある改行や越略点の存在を指摘し、研究者に注意を喚起した。※査読あり</p>		<p>pp. 50-70</p>
<p>(その他)</p>						

「新刊紹介 牧野和夫著『延慶本『平家物語』の説話と学問』」	単著	2007年2月	『仏教史学研究』第49巻第2号(仏教史学会)	牧野和夫著『延慶本『平家物語』の説話と学問』(思文閣出版、2005年)の概要を紹介するとともに、その意義を指摘した。牧野著書を踏まえて、『平家物語』の延慶本が中世の仏教史や文化史の研究に重要な意味を持つことを述べた。		pp. 82-88
「花園天皇関係史料・研究文献目録稿」	共著	2007年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第2号(花園大学国際禅学研究所)	鎌倉後期の重要人物である花園天皇に関する史料や研究文献の内容別目録。花園のみならず、鎌倉後期の持明院統全体の文献目録となるよう、明治以後の歴史学・日本文学・美術史・仏教学・建築史などの諸分野で発表された、400件以上の文献をリストアップした。	坂口太郎、芳澤元	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
「閑院内裏開催修法一覧」	単著	2008年3月	『花園大学国際禅学研究所表『閑院内裏の政治史的研究』(平成18年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)	院政期から鎌倉期までの閑院内裏において行われた密教修法の事例を網羅的に収集し、これを年月日順に並べた上で、道場として使用された殿舎や修法の目的を出典付で示した。		pp. 39-43
「『花園天皇日記(花園院宸記)』正和二年正月記一訓読と注釈一」	共著	2009年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第4号(花園大学国際禅学研究所)	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年(1313)正月記の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。現在学界で用いられる史料纂集の翻刻を、宮内庁書陵部所蔵の花園天皇自筆本の複製に基づいて訂正するとともに、古辞書を参考にして訓読を行った。また、膨大な関係史料を駆使した詳細な注釈を付けた。以下、毎年続編を発表している。	花園天皇日記研究会(坂口太郎、長村祥知、村山識、芳澤元、金正文、花田卓司)	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
「新刊紹介 吉岡眞之・小川剛生編『禁裏本と古典学』」	単著	2009年12月	『日本史研究』第568号(日本史研究会)	吉岡眞之・小川剛生編『禁裏本と古典学』(塙書房、2009年)の概要を紹介するとともに、その意義を指摘した。近年研究が進みつつある禁裏・公家文庫研究を代表する論集であり、提示された多くの基礎的データが、今後の研究に大きな便益を与えることを述べた。		pp. 63-64
「『花園天皇日記(花園院宸記)』正和二年二月記(一)一訓読と注釈一」	共著	2010年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第5号(花園大学国際禅学研究所)	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年(1313)2月記前半の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。	花園天皇日記研究会(坂口太郎、横澤大典、米澤隼人、花田卓司、中村健史、村山識、阿尾あすか、長村祥知、芳澤元)	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
「『花園天皇日記(花園院宸記)』正和二年二月記(二)一訓読と注釈一」	共著	2011年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第6号(花園大学国際禅学研究所)	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年(1313)2月記後半の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。	花園天皇日記研究会(坂口太郎、長村祥知、阿尾あすか、芳澤元、中村健史、花田卓司、横澤大典、米澤隼人)	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能

「『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記一訓読と注釈一」	共著	2012年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第7号（花園大学国際禅学研究所）	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年（1313）3月記の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。	花園天皇日記研究会（坂口太郎、長村祥知、中村健史、芳澤元、横澤大典、米澤隼人、花田卓司、阿尾あすか）	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
「後宇多院関係史料・研究文献目録稿（上）」	単著	2012年2月	『高野山大学密教文化研究所紀要』第25号（高野山大学密教文化研究所）	鎌倉後期の重要人物である後宇多院に関する複製・翻刻史料や研究文献の内容別目録。後宇多院のみならず、鎌倉後期の後醍醐天皇の文庫目録となるよう、収集の範囲を広くとり、明治以後の歴史学・日本文学・美術史・仏教学・建築史などの諸分野で発表された、600件以上の文献をリストアップした。		pp. 37-74
「後宇多院関係史料・研究文献目録稿（下）」	単著	2013年2月	『高野山大学密教文化研究所紀要』第26号（高野山大学密教文化研究所）	同上。		pp. 119-162
「文観弘真関係文献目録稿」	単著	2013年3月	『紫苑』第11号（京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール）	後醍醐天皇の側近僧である文観弘真に関する研究文献の内容別目録。明治以後の歴史学・日本文学・美術史・仏教学などの諸分野で発表された文献をリストアップした。		pp. 61-72
「『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記一訓読と注釈一」	共著	2013年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第8号（花園大学国際禅学研究所）	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年（1313）4月記の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。	花園天皇日記研究会（坂口太郎、花田卓司、窪田頌、横澤大典、米澤隼人、阿尾あすか、中村健史、長村祥知、芳澤元）	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
「文観と後醍醐天皇の王権一称名寺聖教「護摩要鈔」の奥書より一」	単著	2014年2月	神奈川県立金沢文庫編『中世密教と〈玉体安穩〉の祈り』（神奈川県立金沢文庫）	後醍醐天皇の側近として重要な役割を担った、真言僧文観の事績について新事実を示した。かつて網野善彦氏は、後醍醐の特異性を強調し、後醍醐とその父後宇多院とを対照的に捉えたが、称名寺聖教「護摩要鈔」の奥書によれば、文観は後醍醐に仕える前に、後宇多に仕えていたことが判明する。後醍醐側近の真言僧は後宇多に仕えた前歴を持つ人物が多く、文観もまたその一人であることは明らかである。後醍醐王権の宗教的特質を考える上では、前代の後宇多とその周辺の状況を適切に踏まえる必要がある。		p. 45
「『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（一）一訓読と注釈一」	共著	2014年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第9号（花園大学国際禅学研究所）	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年（1313）5月記前半の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。	花園天皇日記研究会（坂口太郎、中村健史、小橋慧子、長村祥知、窪田頌、花田卓司、芳澤元、米澤隼人、阿尾あすか）	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能

「『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（二）一訓読と注釈一」	共著	2015年3月	『花園大学国際禅学研究所論叢』第10号（花園大学国際禅学研究所）	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年（1313）5月記後半の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。	花園天皇日記研究会（坂口太郎、中村健史、米澤隼人、長村祥知、芳澤元、小橋慧子、花田卓司、窪田頌）	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
「『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年六月記一訓読と注釈一」	共著	2016年3月	『京都大学国文学論叢』第35号（京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室）	鎌倉時代後期の重要史料である『花園天皇日記』正和2年（1313）6月記の本文を再校訂し、厳密な訓読と詳細な注釈を加えた。	花園天皇日記研究会（坂口太郎、中村健史、窪田頌、阿尾あすか、米澤隼人、三角健、花田卓司、芳澤元、水嶋彩乃、小橋慧子、田村亨、長村祥知）	共同編集につき本人担当頁数の抽出不可能
(学会報告)						
「東京大学史料編纂所蔵『五大虚空蔵法記』について—後醍醐天皇と後宇多院法流—」		2008年10月	日本古文書学会第41回大会（福井県敦賀市プラザ万象）	近年、後醍醐天皇の宗教権威の前提に、その父 後宇多院の密教興隆があることが指摘されている。これをうけて、新史料『五大虚空蔵法記』を紹介し、後宇多が創始した大覚寺門跡・後宇多院法流が後醍醐の宗教的護持に大きな役割を果たしたことを明らかにした。また、鎌倉北条氏の残党による建武政権転覆計画を指摘し、後醍醐の権力が水面下で大きな危機を迎えていたことを論じた。		
「知られざる僧伝研究者 島田乾三郎—その業績と蔵書をめぐって—」		2010年10月	佛教史学会第61回大会（佛教大学）	龍谷大学大宮図書館に所蔵される、近代の仏教史研究者・島田乾三郎の遺稿群を紹介するとともに、その学問的価値について具体例を挙げつつ論じた。また、島田の事績に関して、同時代の仏教史研究者との交流を中心に解明した。今後の仏教史研究は、このような戦前の研究者の築いた学問的業績に十分な目配りを置いて前進させていく必要がある。		
「高野山大学図書館蔵『御遺告弘秘抄 第四上』をめぐって—後醍醐天皇の如意宝珠造作—」		2013年6月	佛教文学会平成25年度高野山大会（高野山大学）	新史料『御遺告弘秘抄 第四上』に基づいて、正中元年（1324）12月に後醍醐天皇が側近僧の文観とともに行なった如意宝珠（真言密教の霊宝）の造作について考察した。とくに、後醍醐が宝珠の材料として東寺の仏舎利32粒を用いた事実を指摘するとともに、宝珠造作が正中の変の直後に行われたことから、後醍醐が政治的危機を回避すべく、宝珠の霊力に大きな期待を寄せていたと論じた。		
(シンポジウム)						
「北畠親房と真言密教—大覚寺統の密教興隆との関係を中心に—」		2012年12月	皇學館大学研究開発推進センター神道研究所平成24年度公開学術シンポジウム「北畠親房をめぐるとの諸問題」（皇學館大学研究開発推進センター神道研究所）	北畠親房と真言密教の関係については、これまで親房の著作『真言内証義』を中心に研究が進められてきた。しかし、親房を真言密教に結び付けた背景は、いまだ不明のままである。そこで、親房の祖父北畠師親が真言密教に信仰を寄せていたことを解明し、師親が親房と密教との関係を考える上で重要な存在であることを指摘した。また、親房の主君後宇多院は、真言密教の興隆を強く推進しており、この後宇多の宗教政策が、南朝を率いる晩年の親房に影響を与えたことを論じた。		

<p>「網野善彦「異形の王権」をめぐって」</p>		<p>2014年3月</p>	<p>寺社縁起研究会・関東支部シンポジウム「鎮護国家の祈りと言説」(神奈川県立金沢文庫)</p>	<p>中世の天皇と宗教との関係を考える上で、後醍醐天皇は大きな存在である。後醍醐の研究史を振り返ると、1986年に発表された網野善彦氏の「異形の王権—後醍醐・文観・兼光—」が重要な位置を占めている。網野氏は後醍醐の真言密教への傾倒を「異形」と評したが、近年では後醍醐を含んだ鎌倉後期の王権全体が密教と緊密な関係を結んでいたことが明らかになっている。そこで、①近代以降の後醍醐研究の軌跡をたどるとともに、②網野説で展開された後醍醐論に吟味を加え、③鎌倉後期の王権と密教について若干の展望を示した。</p>		
---------------------------	--	----------------	--	---	--	--

※名称の欄に「著書」「学術論文」「その他(含.学会発表)」の項目名を記して、項目別に列記してください。